

act 1

art, culture, tradition

[発行] 札幌市教育文化会館
アクト

JULY 2010

フィギュア・アート・シアター

Figure Art Theatre

Kasperek
by Noriyuki SAWA



これって本当に人形劇？

人形劇とは思えない程、アーティストックでドラマチック。
大人も楽しめる、進化したエンターテインメント。
それがフィギュア・アート・シアター。



フィギュア・アート・シアターが、札幌で盛りあがってきているらしい。なにやら3年計画でフィギュア・アート・シアターの役者を育てるプロジェクトが発足していて、その準備は着々と進められているとか。ところで、「フィギュア・アート・シアターって、何?」という人も多だろう。それは、現代における新しい人形劇のこと。「人形劇ってこどもが見るものでしょ」と冷めた目でみていたら、もったいない。なにしろフィギュア・アート・シアターでは、サーカスが登場したり人形劇なのにライブが行われたりと、度肝を抜かれる演出が少なくないからだ。チョコから生まれたフィギュア・アート・シアターは、大人が見ても楽しめる、ドラマチック

なエンターテインメントなのだ。

そもそも、世界中に存在する人形劇というジャンルもあなどれない。スターウォーズに登場する「ヨーダ」は、文楽における「三人遣い」という手法を研究して作り出されたキャラクター。さらに、ミュージカル「ライオンキング」の演出家ジュリー・テイモアは、もともと人形劇の作・演出家であるし、「シルク・ドゥ・ソレイユ」にも人形劇を学んできた団員が参加している。こんな風に、人形劇は映画やミュージカルなど様々な分野に飛び出していく才能を生み出す柔軟なフィールドなのだ。人形劇の新しい進化系の形「フィギュア・アート・シアター」に、ちょっと目を向けてみよう。

百聞は一見に如かず。日本でフィギュア・アート・シアターの第一人者と言われている人形師・沢則行さん(詳しくは中面で)の作品群をチラッとみせてもらおう。

3匹のこぶたとオオカミ

誰もが知っている「3匹のこぶた」。
これがフィギュアアートシアターとして上演されると、オオカミ役は人間がつとめる事になり…。人形と役者の、壮絶な戦いが見物。



うさぎ

うさぎの耳は取り外し可能!
その理由は…想像にお任せします。



キツネ(仮面)

かぐや姫に求婚する貴族を、狐にたとえて演じる。かぐや姫を慕うあまり、恋のライバル達の首を落とすという恐い一面も。



かぐや姫

繊細な色づかいが評価の高い、沢版「かぐや姫」。背丈150cmはあり、舞台中央に立つとまるで人間のように存在感がある。



カシュパーレク

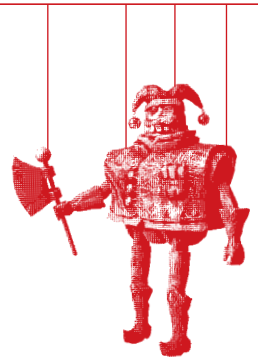
チェコの喜劇に出てくる伝統的なキャラクター。皮肉を言ったり冗談を言って笑わせるなど、道化役として登場。「トムとジェリー」で言えばジェリーの役どころ。憎めないカワイイ奴である。



サル(仮面)

かぐや姫に求婚する貴族のひとり。豊臣秀吉などをイメージして制作。古今東西、様々なイメージを美術制作に盛り込んでいる。





チェコ生れの フィギュア・アート・シアター

新しい人形劇・フィギュア・アート・シアター。
ところで、それはどうやって生み出されたのだろうか？
その背景には、チェコという国の歴史が、深くかかわっている。

チェコという国には、海がない。そのかわりドイツ・オーストリア・ポーランド・ハンガリーという4カ国のお隣さんに囲まれ、いろんな文化の通り道になる国だった。そんな中でドイツやイタリア、オランダから人形芝居が入ってきたというわけだ。しかし、時には通り過ぎるだけではなく、「侵略」という形をとって他国が居座る事もたびたび。オーストリア・ハンガリー帝国に支配された18世紀から19世紀にはドイツ語が公用語となり、なんと都市部や公の場ではチェコ語を話す事が出来なくなってしまった。このままではチェコ語だけでなくチェコの文化まで失われてしまうかも…と思われたが、人形劇や芝居の中だけではチェコ語を使うことが許された。チェコの人々はカシュパーレクという道化役の人形に支配者たちへの皮肉をいわせ、日頃のうっぷんをはらすことも。人形劇はチェコの人々にとって母国語で思う存分娯楽を楽しむことができる大事な時間だったのだ。その後、チェコはナチスドイツの支配も受けたが、第二次世界大戦後、その支配から免れ社会主義国家として歩み出した。え？社会主義って？カンタンに言うと主要な生産手段はなんでも国で管理して、一人勝ちは出さないように利益を分配しようとする考えで、国内の様々な部分が国有化されていった。そんな時代の流れのおかげで、公立の劇場が主要都市に建てられ、人形師たちは公務員として働けるようになったわけ。それまで地方巡業をしながら観劇料でぼろぼろと生活費を得てきた人形師たちだったが、国家と言うスポンサーがついて芸術性を高めることに専念することができるという、なんともうやましい状況になったのだった。

しかし、人形劇には数々の制約がある。生きてるように人形を動かす技術だったり、表現したい内容に近づけるための美術制作など、限られた条件でつくりなければならない。そのうえ、社会主義の中では検閲や美術表現への制限も課せられていた。潤沢な資金を得ることはいいことづくめのように思えたが、結果としてあらゆる人形劇の表現が考え尽くされ、人形劇制作は行き詰まりを見せるようになった。さらに、1960年代に差しかかると社会主義経済にかげりが見え始め、国民の不満はふくらむ一方。政権はそれを抑えるために言論と出版の自由の範囲を拡大した。美術・文学・社会・科学は復興の時代を迎えたが、皮肉なことに人形劇はその時代から遅れをとり、劇場から客足はほとんど遠のいていく結果を招いてしまった。新しいジャンルを創造していかなければ、人形劇団が生き残っていく術はない。さあ、どうする！と考へて、ぎりぎりのところで生まれたのがのちに「フィギュア・アート・シアター」と言われる試みなのである。

最初は人形劇に俳優を登場させたり、人形には見えないようなオブジェを舞台に置くだけだったが、次第に人形劇の中でライブを行ったり、サーカスの要素を取り入れたりと、その世界はとどまるところを知らず開花していった。たっぷりの資金があっても、行き詰まってしまった人形劇。やっぱり、国の監視のもとでは自由に作ってられないということだったのだ。実力勝負の世界だからこそ、面白いものができる。人形師たちの熱いバトルが、世界中のアートを巻き込んで、フィギュア・アート・シアターという新世界を作り出そうとしている。

Imagine Figure Art Theatre

フィギュア・アート・シアターって、ちょっとわかりづらいかも？
まずはイメージしてみよう。

- 人形劇 × 仮面
- 人形劇 × 演劇
- 人形劇 × サークス
- 人形劇 × 影絵
- 人形劇 × 人形浄瑠璃
- 人形劇 × ダンス

ジャンルの壁を飛び越えて、どんどん新しい世界を作っていく舞台

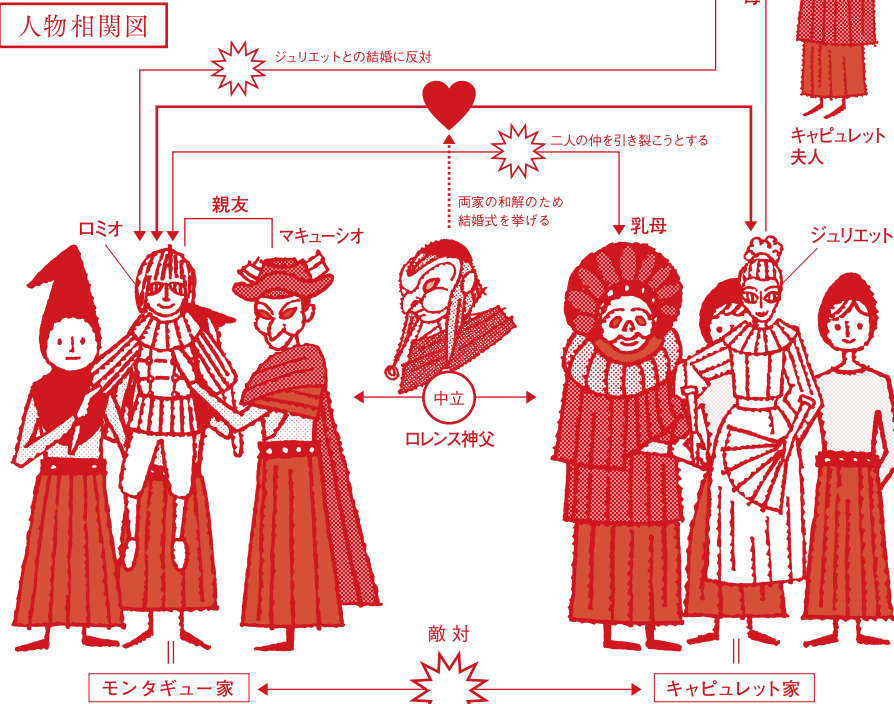
これって一体、どんな舞台になるの？ そう、そんな想像もつかないような舞台を、アイデア・技術をこらして作り上げていくのがフィギュア・アート・シアター。見たこともない世界が舞台で繰り広げられる、革新的な人形劇なのだ。

フィギュア・アート・シアター解説

国際交流基金十劇団ドラック版

「ロミオとジュリエット」

2001年に上演された「災いあれ！相争う者どもよ！」は日本・チェコ現代人形劇共同制作プロジェクトとしてつくりあげられた、フィギュア・アート・シアター版「ロミオとジュリエット」。日本の人形浄瑠璃の「三人遣い(三人でひとつの人形を操作する技法)」を取り入れた意欲作となり、国内外からも高い評価を得た作品だ。



「モル・ナ・ティ・ヴァシェ・ロディ! (災いあれ! 相争う者どもよ!)」/主催: 国際交流基金十劇団ドラック(チェコ共和国)
<http://www.jpft.go.jp/j/culture/new/old/0107/07-02.html>

なぜ主人公だけが人形なのか？ 名作『ロミオとジュリエット』からさぐる フィギュア・アート・シアターの魅力

「操る」側と「操られる」側の関係性を、はっきりと描き出すために

世界中で知られているシェイクスピア原作の戯曲『ロミオとジュリエット』。敵対する2つの名家の令嬢・子息として生まれ、せめぎあいの中で恋に落ちてしまう二人。チェコでのフィギュア・アート・シアターの第一人者・クロフタ氏がこの物語を表現する際、ロミオとジュリエットだけが人形である必要がありました。何故か？それは「操られている」主人公達の不幸な運命を描き出すためでした。ロミオとジュリエットの背後には、乳母や兵士、両家の父や母などの俳優達がいつもいて、二人を操っています。そして、言うことを聞かない二人を文字通り自分達の思い通りに「操ろう」とし、仲を引き裂こうとします。愛し合う二人は地位や名誉を捨てて駆け落ちを決意しますが、操る人から逃れる、という事は二人にとって「死」を意味するのです。フィギュア・アート・シアターをつくる上で「舞台上のすべての存在には役割と理由が必要である」と考えるクロフタ氏は、人形を使って、操る事自体をテーマにする事で、「操る」「操られる」という日常世界にもある関係性を描き出しました。この作品は人形しか出てこない人形劇では描ききれなかった、より深いテーマを観る人に突きつけるものとなりました。

シェイクスピアの名作をおさらい 5分でわかるストーリー紹介

舞台は14世紀のイタリア、ヴェローナ。そこには対立する2つの名家・モンタギュー家とキャピュレット家があった。モンタギュー家の息子・ロミオは、友人のマキューシオと一緒にめぐりこんだ舞踏会でキャピュレット家の娘・ジュリエットに恋してしまう。ジュリエットもロミオに思いを寄せ、二人は愛を誓い合う。それを見ていたジュリエットの乳母はジュリエットの身を案じ、なんとか二人の仲を引き裂こうとする。思いあまったロミオは神父へと相談。神父は二人の仲を認め、秘密裏に結婚式に立ち会う。晴れて夫婦になったロミオとジュリエットだっ

「おお、ロミオ、ロミオ、どうしてあなたはロミオなの？」ストーリーは全部知らなくても、タイトルとこの台詞くらいは聞いたことがあるという人も多いはず。演劇、ミュージカル、映画、オペラ、バレエと様々なジャンルで演じられる人気作品。

たが、ロミオは両家の争いに巻き込まれ、殺人の容疑で追放処分となる。一方、ジュリエットの母はジュリエットに縁談話を進めようとする。ジュリエットに相談された神父は、ジュリエットに42時間仮死状態になる薬を与える。死者として堂前に埋葬され、目覚めたところに、知らせを受けて迎えに来たロミオと駆け落ちする手はずを整えようとした。しかし、手違いでロミオに連絡が行かず、棺の中のジュリエットを見てロミオは毒をおり死んでしまう。目覚めたジュリエットは倒れたロミオをみて、自らも短剣で自害してしまうのであった。

INTERVIEW

沢 則行インタビュー [人形師]

札幌だからできる、マルチなプロの育成

チェコの芸術大学でフィギュア・アート・シアターを学び、世界中の芸術祭などで数々の賞を受けている札幌出身の人形師・沢則行さん。日本でフィギュア・アート・シアターの第一人者と言える沢さんに、その魅力がかかわっているプロジェクト「フィギュア・アート・シアター 役者養成講座」についてお伺いしました。

既存の壁を取り払う人形劇

フィギュア・アート・シアターって、始まったのはもう50年前。だからある意味クラシックになりつつあるんですけど、枠組みがないからこれが完成形ってこともない。「人形劇はこうつらなくちゃいけない」という王道を外れるような人形劇をつくらうとするものなので、人形を使う演劇って言われたり、未来の人形劇って言われたりもしますね。そんなわけでフィギュア・アート・シアターはこうつらなければっていう定義はないんですけど、僕が師事したヨゼフ・クロフタ氏は「なぜこの芝居に人形が必要なのか」ということを考えて人形劇をつくらう、という人でした。チェコには国立の芸術大学があって、その中には独立して人形劇を学ぶ学科もあります。学生は大学付属の劇場で公演をするんですが、まったく人形が出てこない芝居もいっぱいありますよ。チェコの学生は、5年間役者としての訓練も受けますから、人形を持たなくても舞台は作れてしまうんです。

卒業後、映画俳優になったりテレビの仕事についたりする学生もいっぱいいて、その中で人形劇団に入る人もいます。僕は海外からの研修生として1年半ほど舞台美術科にいましたけど、デッサンや油絵の授業もあったし、マリオンネット制作の講座や、人形舞台美術のコンセプトを出したり、とにかく人形劇に関するさまざまな事を学ぶわけです。

札幌発 「フィギュア・アート・シアター 役者養成講座」

チェコは国立劇場があって、劇団員も準公務員だけど、日本だとそういうわけにはいかない。ほんとは日本にも人形劇専門の学校があれば考えたんだけど、学校という入れ物が欲しいわけじゃなくて、「その道で食べていける人を作りた」って思ったんです。それがいま教育文化会館と取り組んでいる3年がかりのプロジェクト「フィギュア・アート・シアター 役者養成講座」。

オーディションで選んだ18人と3年かけてフィギュア・アート・シアターの作品を作ろうとしていて、今年で2年目です。参加者はそれぞれ演劇をやっていたり美術や音楽に秀でてた人たちなんですけど、人形作りにも参加してもらって、芝居の進行自体も全員で作っていく。人形劇だけ食べていくのは難しいけど、音楽が

できて、脚本も書いてとなると、選択の幅が広がっていくでしょう。札幌には日本で初めてできた公立の人形劇場「こぐま座」があったり、たぶん日本一アマチュアの人形劇団が多い街で、50以上のサークルがあるんです。僕もそういう環境の中で学生時代から人形劇というものに参加していった経緯があります。

教育大学の人形劇部にいた頃は、こぐま座と競演させていただいて教えてもらうこともありました。そういう活動がきっかけでプロの人形劇団からやってみないかと誘いを受けて今にいたるわけです。ですから、札幌にあるせつかつ台をもっとプロの職業に結びつけていけるものにしていきたいと思っているんです。

宮沢賢治の 不思議な世界が 夜の円山動物園に出現

今回、そのメンバーで作っているのが宮沢賢治作「注文の多い料理店」をモチーフにした作品です。この物語って、人間が狩りをしに山奥に入っていくって、逆に動物にやっつけられちゃう話でしょう。それを劇場じゃなくて、夜の動物園の中でやろうっていう企画なんです。こういう自由な発想がフィギュア・アート・

シアターのおもしろいところだと思うんです。もちろん舞台の上でも様々な試みを表現していく予定です。完成作品は2011年に発表予定ですが、今年はプレ公演として9月に円山動物園で発表します。まだまだどんな作品になっていくかはわかりませんが、楽しみにしてください。

PROFILE

沢 則行 Noriyuki SAWA

1961年札幌生まれ。北海道教育大学特別教科(美術・工芸)教員養成課程卒。人形劇団ひとみ座、美術教師を経て、1991年に人形劇を学ぶため渡仏。そこでチェコのDAMU(Academy of performing Arts in Prague)演劇・人形劇学部部長ヨゼフ・クロフタ氏のワークショップに参加。92年からDAMUの演劇・人形劇学部で学ぶ。その後同学部の講師を務め、人形美術家、演出家、演技者として、チェコを拠点にヨーロッパを中心に活動する。2006年、イタリア、スペイン、フィンランド、英国、韓国、台湾など一人芝居の世界ツアーを展開。2009年、NHKテレビ「みんなのうた」で椎名林檎の「二人ぼっち時間」の映像を担当。ヨーロッパ文化賞「フランツ・カフカ・メダル」など、受賞多数。

